

幼いころからアフリカに憧れを抱いていた私にとって、このプログラムは大きな意味を持つものとなった。最初にプログラムの募集のメールを見たとき、オンライン交流会ののち、抽選でケニア行きのメンバーを決めるとのことで、オンライン授業が苦手な私は応募するか正直なところ迷った。しかし、学部内の友人の誘いが決定打となり、応募することとなった。参加してみると、時差もある遠く離れたケニアに暮らす学生とオンタイムで意見を交換し合えるのはやはり魅力的で、オンラインの強みを感じた。オンライン交流会は2週間弱、月曜から金曜に毎日約3時間行われ、長く感じることもあったが、その分メンバーの考え方や個性も感じることができ有意義な時間となった。

ケニア研修では、医療に関する施設を見学させていただいたり、長大医学部ケニア拠点にお邪魔したりと全体的には医薬系の研修がメインであった。多文化社会学部所属で医薬系の施設をまわってもあまり意味がないのではと思われるかもしれないが、学ぶことは多くあった。医療に関する学びはもちろんのこと、診療所の活動体制から現地の人々の生活の仕方が垣間見えたり、施設を訪れる人々の表情や服装も観察したりすることができた。移動の間交通や人々の様子を観察したり、スーパーで買い物しながら人々の生活を感じたりすることからも十分に学びがあったと感じる。また、同じ施設や物を見てもメンバーそれぞれで感じる観点が全く異なったことも興味深かった。日本からケニアへは5人が抽選で選ばれたが、その専門分野はバラバラで、その分みな全く違うところに着目していたのだ。私が人々の服装や建物の特徴に着目していると、他のメンバーはその地域の経済システムに思考を巡らしていたり、歯の欠損の有無やその位置を観察していたりする。そして移動時間等でそれぞれ感じたことを話すことで分野を超えた学びを得ることができたし、純粋にここまで見える世界が違うのかと面白かった。また、こうして幅広い分野から問題をとらえてアプローチすることがプラネタリーヘルスにつながるのだろうと実感した。

日本メンバーもケニアメンバーも、1週間程度で築いたとは思えないほどの絆で結ばれたと感じる。日本メンバーも、オンラインで交流があったとは言え初めて空港で集まったときにはまだよそよそしかったが、皆初めてのアフリカで、協力しながら飛行機を乗り継いだり、ホテルではUNOをしながら現地のスーパーで買ったお酒を飲んだりするなどして交流を深め、最終的には家族のような居心地の良さを覚えていた。ケニアメンバーに関しても同様で、初めは日本メンバーとケニアメンバーで分かれて会話したり車に乗ろうとしたりすることが多かったが、気づいたら国籍など関係なく絡むようになっていた。ケニアメンバーと過ごす最終日には、日本メンバーとケニアメンバー2人1組でケニア研修の報告会プレゼンテーションを行った。私は英語でコミュニケーションをとることに長年苦手意識があったが、ホテルの部屋で大好きなケニアメンバーと2人きりで研修や互いの専門分野について語り合う時、どうにか思いを伝えたくて頑張って英語を伝えようとする自分がいた。そして、パートナーもなんとか理解しようと歩み寄ってくれる。英語の学習意欲が湧くことはもちろん、異文化理解を肌で体感することができたように思う。

様々な専門分野の学生が集まり、日本とは大きく環境や習慣の異なるアフリカ・ケニアを訪れることで幅広い学びや知識を得ることができ、同時に大切な友人もできた。プラネタリーヘルスを実現するためにはどんなことをする必要があるのか、どんなことから始められるのか、それが今回の研修で少し掴めたような気がする。